



令和6年9月
港区立港南中学校
校長 佐々木 希久子
“こころ”のサポーター 夏目 富美子

“こころ”のサポーターだより

長い夏休みが終わりました。皆さんはどんな時間を過ごしましたか？
久しぶりにお友達や先生たちに会える日常が戻ってきましたね。

「致知」という雑誌にあったお話を紹介します。母親を癌で失った5歳の女の子が父親のために毎朝みそ汁を作り続ける姿を描いた『はなちゃんのみそ汁』という実話で、父親が語った内容です。

妻の千恵は、はなが4歳の誕生日にエプロンと包丁をプレゼントし、それから1年間、包丁の使い方や調理の段取りを教え、一緒に朝食のみそ汁をつくりました。しかし、5歳になった時、千恵は一切口出しするのをやめ、鰹節を削り、出汁を取るところからすべてをはなに任せました。末期癌だった千恵は「はなが一人でも生きていけるように」という思いがあったのでしょう。はなもまた、千恵との約束通りに毎朝、台所に立ち続けました。千恵の乳癌が見つかり、手術や抗癌剤治療で一度はよくなったものの、はなが生まれて間もなく再発。全身に転移し、手術は不可能と言われました。大型連休を過ぎた頃から体調が急激に悪化したことを思うと、みそ汁づくりを全てはなに任せたのは、自分の死を予感したからなのかもしれません。「もって1か月」と余命宣告を受けてから、癌宣告を受けた同じ日に33歳の生涯を閉じるのです。

千恵は小学校の音楽教諭として働き始め、僕が記者として勤めていた新聞社に真っ白いワンピースを着た女性が訪れ、コンサートの記事掲載と後援の依頼を受けたのですが、これが12歳下の千恵との出会いです。

乳癌が見つかったのは、交際を始めてしばらくの頃。千恵は罹患したことで、大好きだった教師の職を辞さざるを得なくなりました。僕たちは結婚し、千恵は赤ちゃんを授かりました。

癌治療後に妊娠すると、卵巣の女性ホルモンが活発になり、再発のリスクが高まると言われています。一度は墮ろすことも考えたものの、最後には産むと決断。それからの千恵は迷いが吹っ切れたように逞しく明るくなりました。

千恵がはなにみそ汁づくりを教えたのは、自らの死期を意識していたことともう一つ、食の大切さを伝えたいという思いがあったからでした。千恵の死後、しばらくして「弁当の日」という食育を提唱された竹下和夫先生の本を見つけました。「日本中の家庭が毎朝毎晩、食卓を囲むことができれば、子供たちの問題行動は十分の一に減る」という一文に線が引いてあるのを見た瞬間、千恵がはなにみそ汁を作らせようと思った本当の理由が理解できた気がしました。と同時に「食べることは生きること」という自身の願いを僕とはなに託そうとしたことを確信したのです。

皆さんは、この手記を読んで何を感じましたか？私は、娘を産むために自らの命を縮め、はなちゃんの命を残し、先に死んでいく千恵ママのはなちゃんへの強い愛情。はなちゃんと多くの時間は過ごせなかったけれど、はなちゃんに生涯残る大切な食を教えたことに感動しました。これから先、はなちゃんは辛いことがあった時、食べなくなるのではなく、「みそ汁」を作りながらママのことを考え、みそ汁をいただくのではないのでしょうか、、、



モヤモヤすること、心配ごとがあったら、話しに来てください。相談室は、2階職員室ななめ前にあります。ひとりで悩まないで、私たちと一緒に考えていきましょう。

“こころ”のサポーターの部屋ご案内

場所: 港南中学校校舎 2階(職員室後方ドアの前)
開いている曜日: 木曜日・金曜日

困っていること、悩んでいることがあったら、一緒に考えていきましょう。

保護者の皆さまへ
お子さんのことでお悩みがありましたら、お気軽にご連絡をください。

電話での相談も受け付けています(木曜日・金曜日)

★ご予約は下記に★

職員室代表電話番号:03-3471-0238(副校長、学年担当)
“こころ”のサポーター直通電話番号:03-5462-9100(木・金)
※ “こころ”のサポーター以外の者が出る場合がありますが、
ご容赦ください。すぐにお継ぎいたします。

